何を証しするのか

ヨハネ福音書1:29-34

【新改訳2017】

1:29 その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。

1:30 『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。

1:31 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、私が来て水でバプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです。」

1:32 そして、ヨハネはこのように証しした。「御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました。

1:33 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。『御霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。』

1:34 私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証しをしているのです。」

(1:29)ギリシャ語・英語／行間訳

Τῇ	ἐπαύριον	βλέπει	τὸν	Ἰησοῦν	ἐρχόμενον	πρὸς	αὐτόν	καὶ	λέγει,
On the	following day	he saw	(the)	Jesus	coming	toward	him	and	said:

Ἴδε	ὁ	ἀμνὸς	τοῦ	θεοῦ	ὁ	αἴρων	τὴν	ἁμαρτίαν	τοῦ	κόσμου.
Behold,	the	Lamb	of	God	the	takes away	the	sin	of the	world.

【祈りながら考えよう】

（１）旧約聖書の時代には、数え切れないほどの子羊が人の罪のために身代わりとなって殺されたのに、なぜ人の罪は取り除かれていなかったのですか。キリストが「世の罪を取り除く神の子羊」とはどういう意味ですか。旧約時代の身代わりの子羊とはどう違うのですか。

（２）キリストは全世界の全ての人のために死なれたのであれば、全世界の人の罪はみな赦されていて、みな救われると教える「万人救済論」は正しいですか。間違っているとしたらそれはどの点ですか。

（３）ヨハネとイエスは従兄弟であり、知り合っていたはずなのに、「私もこの方を知りませんでした」とはどういうことですか。

【解　説】

（１）私たちは証し人

私たちは主イエスの証し人である。証し人というのは、自分のことを語るのではなく、自分とは別に語るべきお方があって、そのお方のことを人々に語るのである。

そのお方とは、言うまでもなく、私たちを罪から救い出して下さった救い主イエス・キリストである。行いによる証しだけでは足りない。沈黙していては、キリストを伝えることはできない。

コリント人への第1の手紙1章21節には

《神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされた》

神の御心は、私たちが宣教のことばを通して、キリストを正しく伝えることによって信じる者を救うことにされた。証しというものは、まずそのお方がどういうお方であるかということの証言が必要であり、それに続いて、そのお方がどういうことをなさったのかということの証言が必要である。言い換えれば、救い主のご人格とみわざについて語る必要がある。バプテスマのヨハネは、どのように証しをしているかを見たい。

（２）イエスのご人格を証しする

まず第1に、イエスのご人格について、彼はこう言っている。

「『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。私自身もこの方を知りませんでした。

しかし、私が来て水でバプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです。」

…「御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました。私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。『御霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。』私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証しをしているのです。」

①キリストの先在性

バプテスマのヨハネがここでイエスについて証言している言葉の中で、注目すべき表現がある。

「『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。」

ヨハネが、このような言い方を彼がしているのには、次のような理由からと考えられる。

当時、ヨハネ派の人々がいて、彼らはバプテスマのヨハネの弟子であるが、イエスが公生涯の働きを始めると、その大半はイエスの弟子になってしまったのに、少数ながらヨハネの方がイエスよりも偉いのだと主張していた。

こういう人々は、ヨハネの方がイエスよりも偉い理由として、イエスがヨハネからバプテスマを授けてもらったことや、ヨハネの方が半年ほど年長であるとか、公生涯の働きを先に始めていて先輩だということを主張した。この異端はかなり後までも存在していたらしく、紀元三世紀頃にも、ヨハネよりもイエスの方が偉いのだといった議論が存在していた（アレキサンドリアのクレメンス／ギリシア思想とキリスト教神学を結びつけ、以降のキリスト教神学の発展に大きな貢献した神学者／説教集2章16-17、23節）。

バプテスマのヨハネは、イエスの方が自分より偉い理由として、「私より先におられた」からだと言っている。ここで、ヨハネがイエスを「私より先におられた」と言っているのは、年長かどうかということではなく、キリストの先在についての証言である。

これは、キリストご自身が、「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」（ヨハネ8:58）と言われたことや、ヨハネがこの福音書の冒頭で、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」（ヨハネ1:1）と記していることとも共通している。

②神の子である

イエスのご人格についてのヨハネのもう1つの証言は、ヨハネが水のバプテスマを授けるのに対して、イエスは聖霊によってバプテスマを授けるお方であるということである。

ヨハネは、レビ人として、ユダヤの大祭司や王の厳粛な就任式で行われるすべての儀式をよく知っていた。

それで、主イエスは、そのヨハネを満足させるために、天からの可視的(かしてき)証明を受けられ、ご自分の先駆者の目の前で、メシヤとして、油注がれた祭司として、王として、預言者として、公に承認されたのである。

神は、メシヤが来ようとしていること、また、メシヤが来た時には「聖霊」がその上に降臨してとどまる、ということをあらかじめヨハネに告げておられた。そのため、その通りのことがイエスに起きた時に、この方こそ《聖霊によって》バプテスマを授けてくださるお方である、と確信した。

イエスが聖霊によってバプテスマを授けることができるのは、聖霊がイエスの上に下って、その上に留まり続けておられるお方である。だから、神の権威と力をもって人々にバプテスマを授けることが出来るわけで、ヨハネは

はっきりと、「**神の子である**」と証言している。

「聖霊」は人格をお持ちであり、神格を構成する３つの位格のおひとりである。聖霊は、父なる神、御子なる神と対等であられる。

ヨハネは「水で」バプテスマを授けていたが、イエスは「聖霊によって」バプテスマを授けようとしておられた。聖霊によるバプテスマは、人の心にバプテスマを授けることである。このバプテスマはどんな働き人も授けることのできないバプテスマである。

イエスは、「霊的いのち」を与えることの大権を持っている。イエスは、自分を信じるすべての者に、聖霊を与えるお方である。五旬節の日に起きただけのことではない。聖霊は信じる1人1人のうちに宿り、キリストのからだである教会の一員としてくださった（**Ｉコリント**12:13）。

ヨハネがイエスのご人格について証言していることは、イエスはただ単なる人間ではなく、神の子であり、神ご自身であるということである。

イエスの十字架上の死は、私たちにとって、ただ単なる模範という意味を持っているのではない。もしもただ単なる模範にすぎなかったとするならば、私たちの罪のための刑罰は永遠に私たち自身が受けなければならないことになる。しかしそうではなかった。

それでは、どういう意味を持っていたのか。それが、イエスのみわざについての証言として続いていく。

（３）イエスのみわざを証しする

①世の罪を取り除く神の子羊

エルサレムから祭司たちとレビ人たちがやって来た日の翌日、ヨハネが目を上げると、「自分のほうにイエスが来られる」のが目に入った。その瞬間、身震いと感動のあまり、ヨハネはこう叫んだ。

《見よ、世の罪を取り除く神の子羊》

ヨハネのこの言い方は、旧約聖書を背景としている。旧約聖書の中には、身代わりに罪の贖いをする救い主についての預言がある。特に有名なのは、イザヤ書53章に記されている「苦難のしもべ」の預言である。次のように記されている。

「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。……彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。虐げとさばきによって、彼は取り去られた。」（イザヤ53:4-8）

また、過越の祭りの子羊は、神の民イスラエルに下るべき神の裁きを先取りし、身代わりに殺されてしまった。その証拠として、その殺された子羊の血を入口の二本の柱とかもいに塗ってあるイスラエルの民の家は、裁きをまぬがれ、過ぎ越された。

屠られた子羊

しかし、旧約の時代、ほふられた子羊の血が罪を取り除くことはなかった。それらの子羊は型であって、神がいつの日か、実際に罪を取り除く「**子羊**」なるお方を送ってくださる事実の予表であった。

長年、信仰深いユダヤ人たちはこの「**子羊**」なるお方を待ち望んでいた。そして今やその時が到来し、バプテスマのヨハネは、正真正銘の「**神の子羊**」が来られたことを高らかに宣言した。

キリストは、実に私たちこの世に生きている者たちの罪を取り除くためにこの世に来られ、十字架上で身代わりの犠牲として死なれたのである。私たちが受けなければならない裁きを身代わりに受けて死んで下さったことによって、私たちはもはや二度と裁かれることがない者とされた。

ヨハネはその証しの生活の二日目に、イエスをこのようなお方として紹介した。しかし、これは、イエスご自身によっても、また後にパウロやペテロによっても証しされたことであった。

しかし、ここで誤解しないでいただきたい。イエスが「世の罪」を取り除く、とヨハネが言ったのは、すべての人の罪がそのゆえに赦される、という意味ではない（万民救済論）。

キリストの死は全世界の罪の代価を支払うのに十分なものであった。しかし、赦されるのは、主イエスを救い主として受け入れる人だけである。

②ギノースコーとオイダの違い

最後に、ヨハネがここで二度も繰り返して、イエスのことを「**私自身もこの方を知りませんでした**」と言っていることを考えたい。ヨハネがこう言ったのは、必ずしも、以前一度も会ったことがない、という意味ではない。というのは、ヨハネとイエスはその誕生が半年違うだけで、親戚同士であったわけであるから、お互いをよく知る仲であった、ということは十分に考えられる。

イエスが公生涯の生活に入られるに当たり、ヨハネの所へ行って、バプテスマを受けられた時、ヨハネはイエスをただのお方ではないと認めている。主が水から上がられると、神の「**御霊が鳩のように**」降りて来て主の上にとどまったのであった（**マタイ**3:16**参照**）。

それなのに、どうしてここでヨハネはこんなことを言っているのか。それを解く鍵は、ここで使われている「知る」という言葉である。

普通よく使われるギノースコー（γινώσκω）というギリシャ語は、観察や経験によって知ることを意味するが、ここで使われているのは、これとは別のギリシャ語である。

それは、オイダ（οἶδα）という言葉である。これは、神の特別啓示や直感や内省によって知ることを意味する。

それまで知らないわけではなかったイエスという人物が、神の特別啓示によって、救い主（メシヤ）であるということを知ったのである。

私たちはイエス・キリストをどういうお方として知っているだろうか。自分を罪から救い出して下さった救い主の神として知っているだろうか。

「**世の罪を取り除く神の子羊**」は、私たちの罪の身代わりとして十字架上で死なれた後、三日目に甦って、勝利者として今天におられる。「**屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方**」（**黙示録**5:12）であり、「**子羊は主の主、王の王**」（**黙示録**17:14）であられるお方である。

私たちの罪とその刑罰から救って下さると同時に、私たちがなかなか打ち勝つことができないでいる自分の弱さ、悪い習慣や性格の根本的な原因である罪の力に打ち勝たせて下さる。私たちは、そのようなお方として、イエス・キリストを信じ、人々に証ししているだろうか。

γινώσκω（ギノースコー）

①知識の中に取り入れる，知るようになる，知るに至る，聞き知る，知る，知っている；（人格的かつ肉体的に異性を）知る
②気づく，知覚する，さとる，
③わかる，理解する，心得ている，（不定詞と）～ができる，
④確かめる，認める，承認する；pres. 知っている状態の継続，aor. は知らなかった者が知るに至る（無知より知への移行）をあらわす．

（c）織田昭 電子版「新約聖書ｷﾞﾘｼｬ語小辞典」改訂第４版

οἶδα（オイダ）

語形は第２完了形だが現在時称の動詞のように使う
①（事実を）知っている，悟っている，分かっている，わきまえて（承知して）いる，見抜いている，認識している，覚えている；［不定詞と］～し方（するすべ）を心得ている
②（人を）神の特別啓示や直感や既知の知識に基づいて内省して知る，知っている；～と面識がある．

（c）織田昭 電子版「新約聖書ｷﾞﾘｼｬ語小辞典」改訂第４版